

人間のように思える。

親子揃って片方は北の極寒地に、一方は当時普通の人なら考えもしない、ロシアの軍医として故国を飛び出す心境に、共通したパーソナリティーを強く感ずる。

開拓の情報源は当然又一だろろうが、斎藤竜安もその一人であつたと思うと、何となく親近感を覚えた。なぜかというところ、明治二年開拓判官島義勇が札幌建設のため、札幌近くの銭函という所に上陸した時、同行した最初の医師二人のうち一人が竜安で札幌病院の前身、札幌元村仮病院で医療活動をしたのは竜安一人であり、札幌最初の医師であるからである。

関寛齋が描いた開拓の理想は、今陸別の人たちによって結実しようとしている。それはまさしく、作家城山三郎氏のいう「光もたらす人」(序文)の願望なのである。

(大西 泰久)

〔陸別町役場町史編さん室、北海道足寄郡陸別町字陸別東一条三一、電話〇一五六二七七一・二四一・ぎょうせい、一九九一年、A五判・二二七頁(非売)〕

松下正明編著『精神医学を築いた人びと』(上・下)

わが国の精神医学界では学説史・人物伝への関心は比較的天高く、『精神医学』誌上には「古典紹介」としてヨーロッパの論文の訳がときどきのつており、『臨床精神医学』誌は「日本の精神医学一〇〇年を築いた人々」の連載をしていた。

いまは廃刊になつた『老年精神医学』誌は「老年精神医学に貢献した人々」を連載していた。この本にまとめられたのは、その連載分と、おそらく掲載予定だつた二篇なのだろう。とりあげられているのは生年順に、ピネル、エスキロール、グリーンジガー、シャルコー、リボー、ウエルニツケ、ピツク、O・ピンスワンガー、コルサコフ、フロイト、クレペリン、アルツハイマー、呉秀三、ボーンヘッフアー、O・フォクトとC・フォクト、ユング、大成潔、シュナイダー、スパツツ、植松七九郎、シヨルツ、尼子富士郎、ロスチャイルド、辻山義光、エイ、ルリア、神谷美恵子の計二八名(うち日本人六名)である。尼子富士郎は精神科医ではないが、老年医学の先達としてとりあげられたのである。筆者はそれぞれの人にくわしい人であり、みずからがその人にしたしく接したことのある人もいる(わたしも呉秀三を担当した)。

じつはこの本には、おなじ松下の編集による続編二冊が予定されていて、そこにはさらに三四名(日本人八名)がとりあげられることになつてゐる。はじめの本では、たとえば下田光造がどうしてはいらぬのかといふかしたが、計六二名となると、わが国および世界の精神医学史の結節点をなす人のほとんどが網羅されることになる。わが国でもこれだけのものがそろつるのは見事であり、それら巨匠の息吹きを日本語で楽に感じとることができるのは、なんとありがたい。

ところで、これだけの人物がそろつとなると、それぞれの人物に関係したことをしらべるさいの便覧としてこの四冊本

をつかうことが予想されなくてはなるまい。するとそれぞれの篇は、その人の伝記の基本的事項、その人の背景・学統、主要業績、またわが国で利用しやすい関連文献などをふくんでいなくてはならない。この点では既刊の二冊に問題がないではない。

たとえば、鹿島晴雄は、コルサコフを疾病観と無拘束治療とを中心に紹介していて、コルサコフ症候にふれていない。

だが、『老年精神医学』掲載分としてはなお、コルサコフ症候を中心にすべきだったのであるまいか。竹友安彦はフロイトを、老年期の精神生活の根本問題である宗教につきどうかんがえたかにしぼってかいた。西丸四方はクレペリンの篇ではもっぱら、初老期精神疾患についてのクレペリンの臨床的記述をたくみにまとめあげている。この二篇は独創的記述で、『老年精神医学』誌上では目をひいたが、こういう本にまとめられると、伝記的記述をかく点が欠陥としてうつってくる。とくにフロイトに関しては、ナチスの迫害およびくりかえしの癌手術のなかでかれが老年をどういきたか、という面も大事におもう。こういった点は、本に編集する段階で補足してほしかった。

ところで、わたしの関心は世界的な広がりにはもてずにいる。外国の学者でいうと、日本の留学生をおおくそだてた、たとえばウィーンの高インリヒ・オーベルштаインが大事である。また老年精神医学では、九州帝国大学にいた榎保三郎をとりあげてよいのではないか。かれはシタイナハの若返り手

術をおこない、老人科を設置したと称した。榎に売名的な面がつよかったにせよ、老年医学に世の注意を喚起したのはたしかであった。歴史は異端もふくんでよい。

下巻の最後に松下は、「精神医学史のもつ意味」で、精神医学史研究の最近の世界的な動向をまとめている。Micalé M. S. をひいて松下がのべるところでは、一九五〇年代までは精神科医による楽観的發展史観を基調とする記述が主であり、一九六〇年代からは精神病院の閉鎖性を批判する反精神医学的傾向がつよくなり、精神医学の社会的側面が強調されていた。一九八〇年代には脱政治化された本格的歴史学的な水準の精神医学史研究がはじめられた。そして松下は、日本における精神医学史研究は、一九五〇年代のそれにちかくて学問としての成熟度はとぼしい、と評価している。また本書は、松下の歴史観に完全にそつたものではないということである。ともかくもわが国では、人物伝は讃歌におわりやすく、人の罪を指摘するにはたいへんな勇氣がある。この点は自省しなくてはなるまい。

(岡田 靖雄)

(ワールドプランニング、東京都港区赤坂二一八一二、
電話〇三―三二二四―一八四五、東京、一九九一年、A
5判、上二七三頁、下二六七頁、上・下とも三八〇〇円)